

# 息さえ、言葉

作 サカイリユリカ

## 【登場人物】

田巻美那子 たまきみなこ (45) 職業作家。未亡人。

市岡孝太郎 いちおかこうたろう (27) 中堅編集者。独身。

## 【時と場所】

大正後期～昭和初期くらい。

作家の家の寝室。

作家・田卷美那子の自宅。夜明け前。

美那子、文机に向かって原稿を書いている。

その傍らのちゃぶ台の近くで正座したまま眠ってしまったっている市岡。  
少しうなされている様子。

市岡　　はっ、はっ、はっ・・・母さん・・・

柱時計が二回鳴り、時刻を知らせる。

市岡、はたと目を覚ましかけて身じろぎする。

美那子、集中して原稿を書いていたが市岡の気配に気づく。

美那子　　市岡くん？

市岡　　・・・あ、え、

市岡　　・・・もう二時！？申し訳ありません田卷先生！

原稿をお書きになっている先生を傍目に寝こけるなど、  
編集者失格です・・・

美那子　　いいのよ。むしろごめんなさいね、私がちゃんとメ切を・・・

市岡　　謝らないでください、先生が良い作品をお書きになるためなら、僕は何度だって印刷所に頭下げますから。

美那子 あら、頼もしいこと。

市岡 ・・あれからずっと書かれていたのですか？

美那子 ええ、まあ。

市岡 いけません、お体に障ります・・

美那子 そんなこと言ってもらえないでしょう。それに今筆が乗ってるの。あと少しで脱稿できるわ。

市岡 本当ですか。では、お茶でも入れましょう。

(探しに行つて) ・・あれ先生、お茶っ葉が切れて・・

美那子 ああごめんなさい、最近出かけていなかったものだから・・

美那子、急に咳き込む。

市岡、美那子に駆け寄り背中をさすつてやる。

市岡 大丈夫ですか、先生・・

美那子 ・・・ええ。これくらい・・・

市岡 あっ、そういえば僕、これを持っているんです。

美那子 飴玉・・？

市岡 ただの飴玉じゃありません！

黒飴と言って、黒砂糖の甘味を引き出した優しい味わいの飴で、のどにも良いらしいんですよ！

美那子  
ふふっ。

市岡  
だから先生もぜひご賞味ください・・・先生？

美那子  
市岡くん、そういうところは子供っぽいよね。

市岡  
そ、そうですか？

昔、母からよくもらったおやつが飴玉で・・・。

先生もお好きかなと。

美那子  
私、あなたのお母さんじゃないわよ。

それくらいの年齢かもしれないけど。

市岡  
そういう意味では！

あの、疲れもきつととれると・・・

美那子  
ありがとう。でも私、実は甘い物苦手なのよね。

市岡  
ええっ！？

美那子  
甘い物よりお酒かな。

脱稿したらハイカラなお酒でも飲みたいわ。

市岡  
あ、それなら浅草の神谷バーの電気ブランというのが

流行っているらしいです。

美那子 行ってみたいわねえ。

さ、じゃあ続きを書かなくちや。

美那子、書きはじめようとするがまた咳き込む。

市岡 先生・・・？

美那子の手のひらには痰が吐き出されている。

美那子、荒い息を整える。

美那子 ごめんなさいね、痰が絡んでしまつて。

驚いたわよね。

市岡 ……え？ああ、平気です。あの、母で慣れてますから。

美那子 ご病気でいらつしやつたの？

市岡 ええ、まあ。

美那子 ……お母様はもう亡くなられていると前に聞いたわ。

やっぱり私も・・・

市岡 先生。病気は治ります。母は運が悪かっただけです。

美那子 そんなこと言つても、太宰先生も最近めつきり肺をやら

れているようだし、

こんな不規則な生活を送っていたら治るものも治らない  
わね。

市岡     ・・先生。もしかして、薬も切らしているのではないで  
すか。

美那子     ・・敵わないわね、市岡くんには。

市岡     締め切り前の先生は、自分の事ないがしろにされがちで  
すから。しかし、困りましたね。

そんなにお辛そうではとても執筆など。

いつそ医者を呼びますか。

美那子     なに言ってるの、こんな時間に。

市岡     でも、万が一の事があっては。

美那子     もうすぐ書き終わるのよ。

・・手を洗ってくるわ。

市岡     先生・・

美那子、部屋を出ていく。

市岡、ふと文机に近づき、書きかけの原稿に目を落とす。

市岡

ええと、

「幸江は母親らしく、気丈に振る舞い、息子の俊を優しく寝かしつけた。

眠りに落ちる俊を見つめるその姿は母そのものであった。

だが、どこか今夜の彼女は浮足立っていた。

一体何が彼女をよそよそしくさせるのだらうか・・・？」

これは・・・！三人称の文体？

美那子

どうかしら？

市岡

先生、どうなさったのですか、これは。

美那子

私が描きたいものを書くためには、この文体でなきや。

市岡

よくこのような思いきった・・・

美那子

私、知ってるのよ。雑誌への連載、打ち切りになるかも

しれないのでしょうか。

もう後がないことくらい分かっている。

市岡

いや、あの、それは。

美那子

あなたは隠しているつもりかもしれないけれど、

嫌でも分かるわ。

私が世間で何て言われているのかもね。

田巻美那子はもう終わりだって・・・

市岡 止めてください、先生。そんな。

美那子 いいの。世間での人気なんて長くは続かないもの。

でも、だったら、私も変わらなきゃ。

市岡 ですが。先生のこれまでの文体のファンでいらっしやる

方もたくさんいらっしやいます。

美那子 それでも、もっと革新的な何か欲しいのよ。

市岡 それがこの文体ですか。

美那子 ええ。

今までの一人称の文体では描けない、

もっと緊張感のある、場面を紡ぎ出したいの。

それにはこういう・・・(咳き込む)

市岡 先生、やっぱり今日はお休み下さい。

僕、またなんとか印刷所に掛け合いますから・・・

美那子 大丈夫よ、これくらい。

印刷所、これ以上待たせられないでしょう。

連載の最終回なのに、原稿落とすなんて考えられません。

市岡 それは・・・まあ、はい。でも。心配なんです。

美那子 ……分かったわ。

市岡 先生。

美那子 ちよつと横になります。

市岡 ええ、お休みください・・・

美那子 (遮って) いいえ。あなたにお願いがあるの。

市岡 何ですか？

美那子 私がこれから小説の内容を話すから、

一字一句漏らさずに書き留めてほしいの。

市岡 え？僕が・・・それはつまり、口述筆記ということですか？

美那子 そうよ。それなら、私の身体への負担も軽くなるでしょ

う？

市岡 ですが・・・僕が口述筆記など・・・

美那子 市岡くん、昔作家志望だったんでしょう？

市岡 え、まあ、それは、はい。

美那子 じゃあ、速記もできるわよ。

それに、私の書いたものを一番読んでくれるのは、

市岡くんでしょうから。

市岡 それは、編集者としてそうである自負はありますが。

美那子 お願いね。

市岡 ……分かりました。

美那子 ありがとうございます。（横になって）では、始めますね。

先ほどの原稿の続きから。

市岡 はい、どうぞ。

美那子 （息を吸って）

「幸江は、鏡台の前に静かに座すと、

丁寧に紅をさし始めた。

鏡の中の自分をどこかうつとりと見つめるやうに。

心なしか頬も上気しており、まるで鏡の向こうに誰ぞ

愛しい人の姿が見えているかのやうでもあった。」

市岡 ……のやうでもあった。と。はい。

美那子 これくらいの速度でいいかしら？

市岡 はい、大丈夫そうです。

美那子 では、続けるわね。

「夜半の事であったので、

息子の俊は当然眠りについていたのだが、

母の只ならぬ気配を感じたのか目が覚めた見え、  
普段見慣れない母の女としての艶やかな姿に戸惑いを  
隠せぬ。

布団にくるまつたまま、母の後姿をしばらく眺めてゐた。  
幸江は黒々とした長い髪を下ろし、今まさに結び直そう  
としてゐるところであつた。」

市岡 ……はい。あの、ちよつとよろしいですか。

美那子 どうしました？

市岡 これは、いったいこの後どのような展開になつてゆくのか、  
でしょうか。

美那子 母と子の許されざる一線を越え…

市岡 それは…

美那子 何か問題でも？

市岡 いえ、別に。ただ…先生の築き上げてきたこれまでの、  
印象と言うものが…

先生、もしかして文壇で先日ご批評されたのを気にされて  
らつしやるのですか？

美那子 「田巻先生の作品は、どうも色気がない。真面目すぎる。」

丁寧な筆致だとは思いますが、

こう、迫ってくるものが今一つねえ。

どうだね、ここはひとつ、激しい恋でも経験してみたら。」

そんな風に批判されたのでは、私だって黙って今までと

同じことを書いてるわけにはいかないのよ。

市岡 あのとときの坂口先生は酔っぱらってらっしゃいましたか

ら。

美那子 だからと云って、あれは侮辱です。

私にも作家のプライドというものがあります。

それに、どうせこれで打ち切りになるのなら書きたいも

のを書いたっていいじゃない！

私なんていつ死ぬのかも分からないし。

市岡 止めてください先生。まだ連載の打ち切りだって決まっ

たわけでは・・・

美那子 とにかく、私の書きたいことを、伝えたい表現で言葉に

したいの。

こんな私の挑戦を、あなたは手伝ってくださいらないの？

市岡 いや、そういうわけでは・・・

美那子

じゃあ、つづけるわ。

「母さん」思わず俊は声を上げてしまった。

いつも近くに居る母が、何処か遠くに行ってしまうような、別の人になってしまったかのやうな気がしておそろしくなつたためだ。

その声に反応して、幸江はゆつくりと振り返り、瞬間、2人の目が合った。

幸江はどこか憂いをたたえたやうな瞳を細めて、何も云わず、ただ俊の姿を捉えてゐた。

俊は、振り向いた母のぞつとするやうな美しさに、思わず身震いした。

そこにいるのは、母であり、1人の男を想う紛れもない1人の女であった。

それは永遠にも感じられる、凍結したやうな時間だった。

薄暗い夜闇の中で、月明かりに照らされた母の影がどこまでもどこまでも伸びてゐくかのように感じられた。」

くっ、ごほっ、ごほっ・・・(咳き込みだす)

市岡 先生！？血が・

美那子 (息を整えながら) お水、汲んできてくださる？

市岡 はい。

水を汲みに行く市岡。

市岡 先生・・・咳き込み続ける先生の苦しそうな息の音が

どこまでも追いかけてくる・

市岡 忘れもしない、あの夜。まだ幼い僕は珍しく真夜中に

目が覚めた。すぐに、母がいないことに気づいた。

隣の布団はもぬけの殻だった。

きしむ廊下を月明かりを頼りに歩いて行くと、

微かに声が響いていた。

聞いたことのない、母の、苦しそうな、

それでいてどこか嬉しそうな・声。

襖は少し空いていた。少し着物がはだけた母の後姿。

長い髪が揺れている。

震える母の華奢な体。時間が止まったようにも、

永遠にも感じた。

物音に気付いたのか、

ゆっくりと振り返った母と目が合った。

ゾツとするほど美しい女性がそこにいた：

か細い唇からゆっくりと白い息が吐き出されては、

また吸い込まれていく・・・

はっ、はっ、はっ・・・

廊下に思わず走りだして部屋に戻って布団をかぶっても、

その母の息の音は消えずに僕の心を蝕んだ・・・

市岡、戻って来る。

市岡 先生、お水です。

美那子 ありがとうございます・・・どうしたの市岡くん、顔が真っ青よ。

市岡 え？いえ、なんでもありません。先生こそ大丈夫ですか。

やはり医者を・・・

美那子 大丈夫よ。さ、続きを・・・

市岡 先生・・・あの、やはりいつもの先生のように。

貧しい母と息子の美しい親子愛、

という結びでいきませんか。

美那子

あなたは分かってない。近親者へ抱く恋心にも似た愛情。共に生活し、日常を送ってきたからこそ

普段とは違う、母の女の姿に説き伏せられる。

美しいじゃありませんか。

市岡

美しいかもしれません。

先生の新しい表現への挑戦も後押ししたい。

そして世間をあつと驚かせて、先生の確かな実力を

世に出したいのは確かです。

美那子

そこまで言うなら。

市岡

でも、ですが、僕は・

美那子

私はね、市岡くん、亡くなった主人との間に、

子供ができなかったんです。

男の子が欲しかったの。

そして息子と一緒に遊びたかった・甘えてほしかった。

でも母になることで、女として見られなくなっていくこ

とにはとても耐えられないと思った。

でも、そうだ、息子が私を女として見てくれれば、

どちらも叶えられる・・・

市岡 先生・・・そんな・・・

(混乱して) 僕の母さんもそんな気持ちだったというの  
だろうか・・・僕は・・・僕は・・・

美那子 私はこれを書かなきゃ、心が落ち着かないの。

さあ、続きを。

市岡 はい。

美那子 「沈黙を破つたのは幸江の方だった。

ゆつくりと、何も云わず固まっている俊の方へ歩み寄り、

そつと俊の頭を撫でて、「俊、お前はいい子だね」

と囁いた。

「母さん、どこかへ行つちやうの?」

「どうしてそんな事云うんだい?」

「だって、母さんがあまりにも綺麗だから・・・」

美那子、激しく咳き込む。

市岡 先生、田卷先生!

美那子 (肩で息をしている)

市岡 「だって、母さんがあまりにも綺麗だから・・・」

市岡

夢を見ていた。

あの幼い日の夜、目が覚めて、

月明かりに照らされた廊下を歩いて行くと、

はっ、はっ、はっ・・

母の苦しそうな、

それでいてどこか嬉しそうな・・声。

はっ、はっ、はっ・・

震える母の華奢な体。揺れる黒い髪。

はっ、はっ、はっ・・

「だつて、母さんがあまりにも綺麗だから・・」

幼いころは分からなかったけれど、僕はあのとき、

確かに興奮していた。

でも、綺麗すぎて怖かった。

このまま母さんが僕を置いてどこかに行ってしまう

んじゃないかっつて・・

「だつて、母さんがあまりにも綺麗だから・・」

はっ、はっ、はっ・・

目が覚めた僕は、母が夜のうちに息を引取ったことを知らされた。

美那子

(荒い息をしながらうわごとのように)

恋の毒は気づいたら全身に回ってる。

全身に回って心臓に到達して、少しずつ蝕んでいくの。

人間が生涯に打つ心臓の回数っていうのは決まってる

いてね、だから心がドキドキするような・・そう、

恋なんてすると寿命が縮まるのは分かりきってるの。

でも、この全身の血が弾むような感覚って、

とっても気持ちよくて、自分はこのために生きてる、

って確かに思えるのよ。

市岡

・・・先生？これは、幸江の・・

幸江の次のセリフですか？

美那子

はっ、はっ、はっ・・・

市岡

ごめんなさい、母さんがあまりに綺麗だから・・

綺麗だから・・母さん、あの男の人は誰？

僕のこと、置いていくの？

はっ、はっ、はっ・・・

美那子 「馬鹿だねえ、お前は。母さんは何処にも行かないよ。  
行けないよ。」

「……お前を置いてなんて行くもんですか。」

市岡 母さん……

美那子 市岡くん、ちゃんと書いてる？

ここからが重要なところなの。

市岡 ……。

ここから、美那子の呼吸は更に激しくなり、時折咳き込みながら、呼吸を整えつつ、話す。

美那子 「俊はその途端に、母に馬乗りになられ、頬ずりをされた。

それはだんだんと激しくなり、その指は顔から首へ、

首から鎖骨へ、どんとどんと俊の肉体を撫でさすつて

いった。」

はっ、はっ、はっ……

市岡 母さん……？母さん、何をしているのですか。

母さんは母さんで、いつも優しい母さんで……なのに、

どうしてそんな荒い息をしているの？

どうしてそんな顔をしているの？

どうして何も言わないの？どうして・・・どうして・・・

どうして僕はこんなにドキドキしているんだろう。

心臓の音が・・・嗚呼・・・静かに！静かになったら！

美那子

「俊はくすぐつたいような妙な気持ちに捕らわれながら、母の寵愛を受け入れていた。すると、母は俊の上で急に体を震わせながら、滔々と語り始めた。」

(息絶え絶えに) 母さん・・・好き・・・お前・・・

市岡  
えっ？今、なんて・・・

美那子  
(息を整えつつ)

「母さん、好きな人がゐるんだよ。今夜、お前を置いて駆け落ちするつもりだった。」

でもね、やつぱりお前を置いてはゆけない。

馬鹿な母さんを許しておくれ。

(大きく息を吸って) ただ、お前さえゐなければ・・・

今頃、私は・・・」

市岡

僕さえいなければ・・・僕さえいなければ、母さんは・・・

嫌。嫌だよ。僕は母さんと離れたくない。

美那子・市岡

「その母の言葉を聞きながら、俊の心の中には墨を垂らしたやうなすす黒い感情が湧き上がってゐた。

それは夜闇の中で浮かび上がった劣情であり、

幼いがゆえの独占欲であつた。」

美那子

「俊は震える母親をあつという間に組み伏せると……組み伏せると……」

美那子の荒い息。

22

市岡

「母さん……母さんは僕のものだ。誰にも渡さない。そんな綺麗な姿を、他の誰にも見せてはいけません……」

美那子

（先ほどより激しく苦しみ喘ぐ）

市岡

先生が苦しむ息の音を聞けば聞くほど、自分の中に抑えがたい感情が湧き上がってくるのを感じた。でもそれを認めてしまったら……怖い。怖いのだ。

また母と同じようにこの人を失うのではないかと。

「母さん・・・母さんは僕のものだ。誰にも渡さない。」

そんな綺麗な姿を、他の誰にも見せてはいけません・・・」

・・・そう云つて母の胸に何度も齧りつくのである。

美那子　　はあ・・・あと少しなのに・・・こんなところで・・・

私・・・もうだめかもしれない・・・

市岡　　「どこにも行ってはなりません。死んではなりません。

ひとりにしないで・・・

あなたのことともひとりにしないから」

美那子　　・・・市岡くん？

市岡　　先生、田巻先生。駄目です。

作家あろうものが途中で筆を折るなんて。

僕はね、先生、まだまだあなたの書くものが読みたい。

あなたの描く世界をこれからも世に送り出したいのです。

美那子　　市岡くん・・・

市岡　　・・・というのは建前です。

僕は、何故だか今夜の先生がとても美しく見えて仕方ないのです。頭がくらくらする・・・

美那子 冗談は止して。

市岡 さあ、続きを。聞かせてください。

「母さん・・・母さんは僕のものだ。誰にも渡さない。

そんな綺麗な姿を、他の誰にも見せてはいけません・・・」

間。

美那子 「幸江は、そんな息子の行動に驚きながらもしつかりと

息子を抱き留め、

2人はそのまま朝まできつく抱き合った。」

・・・結びは、こうよ。

「白む月だけが、2人を見てゐた。」終わり。

市岡 待つて、待つて下さい。

美那子 どうしたの？

市岡 先生、泣いてらっしゃる・・・

美那子 幸江には俊がいるけれど、でも、俊はいない。

私の息子・・・でも、こうやって俊を形にすることが

出来たから、このまま死んでもいいわ。

市岡 やめてください、縁起でもない・

あれ、先生・・・もう寝てる・・・

息が聞こえるって、こんなにほっとするんだなあ・・・

間。

市岡 母さん、僕は、あなたの息遣いを一生忘れない。

いや、忘れられない。

でも、それはあなたの生きた証だからだ・・・

間。

美那子 ……俊。

市岡 先生？起きてらっしゃったんですか？

僕は俊じゃありませんよ。

美那子 ……あなたが俊なら良かったのに。

市岡 母さんじゃないです。先生は。

美那子 え？

市岡 今日のあなたはとても綺麗です。

どうにかしてしまいそうなくらいに。

市岡、美那子の手を握る。

美那子 「幸江は、そんな息子の行動に驚きながらもしつかりと息

子を抱き留め、2人はそのまま朝まできつく抱き合った」

市岡 先生？

美那子 市岡くんも少し横になりました。私も休みたいし。

市岡 え？

美那子 まだ印刷所が開く時間じゃないわ。

市岡 ……では、お言葉に甘えて。

間。

美那子 「2人はそのまま朝まできつく抱き合った。」

2人、笑いあう。

美那子 結びはこうね。

市岡・美那子

「白む月だけが、2人を見てゐた。」

終